
A.S

オーレリア解放同盟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A・S

【Nコード】

N9550Z

【作者名】

オーレリア解放同盟

【あらすじ】

ミラージュプログラム——略称MP

もともと仮想世界で軍事訓練をするために作られた機械はエンターテイメント機として民間用に販売されることになった。

値段が値段であり普及しなかったが、そこに「オーレリア・ストーリー」と呼ばれる体感型MMOARPGが販売され瞬く間に人氣が出る。

これは、友人に勧められこのゲームの中に強制的に閉じ込められたかわいそうな主人公の物語である。

*この小説はスルトと同じ世界観で書かれています。読まなくても
わかりますが・・・

ブローグ

「ふっ!!」

シユンと風を切る音。ブシャツと身体に飛び散る返り血。

目の前に口を開けてだらしく血を吐いている男の腹は俺の腕が貫通している。

そしてドサツと倒れる目の前の男。もう既にそれは死体扱いだ。本来プレイヤーに現れている生^{リブ}アイコンから死^{デス}アイコンへと変わる。

「あ、ありがとうございます」

ひざ丈まである黒いロングコートに腕には赤色の防具を身につけている少年の隣にはドレスを着た少女が立ちつくす。

「ん？護衛の仕事を頼んだのはそっちだろう？俺はそれに答えているだけだ。お礼を言われる筋合いはない。その辺の対応は既に金で済まされているからな」

「でも……」

「さあ、さっさと行きましょう。あなたの帰りを待っている人たちがいるのでしょうか？」

そう言つと俺は前へと進む。

「は、はい!!」

俺がMPと呼ばれる機械と世界を覆う魔法粒子によって作られた世界に来て2年と3カ月がたつ。

現実世界がどうなっているのかは分からない。

だが、俺は帰れる見込みのない世界には用は無い。もっここで生きることを決めた。

この、何でもあるゲームの世界に――

STAGE 1：後の祭り

ミラージュプログラム。通称MPが出来たのはつい最近だ。

——
蜃気楼

このシャンバラと呼ばれる地球と酷似した世界には1万と1千年前に起こった大戦争で魔法粒子、略称MET^{セット}と呼ばれる粒子に覆われるようになった。

昔は攻撃、治癒、防御、精霊化等の様々な魔法を行使するために。

現在は自動車、携帯、パソコンなど、様々な電子機器を動かすのに必要な粒子である。

蜃気楼とは大気中のMETが地上や水上の物体として一時的に具現化される現象。大気MET現象と呼ばれる。

ミラージュとは今となつては使えない魔法の呪文で蜃気楼を意味する。

ミラージュプログラムとは、蜃気楼と呼ばれるこの具現化現象を人間の手で強制的に起こさせ、今いる空間とは別に空間を作りそこで暴れまくって軍事訓練を行うために作られたものである。

だが、つい最近ゲーム技術が大幅に向上し、ついには民間用MPが発売されるようになった。

子供たちは体感型ゲームができるとして飛びついたがさすがに虫がよすぎると言ったところか？子供たちが望むようなゲームはできな

かった。

そこで、売上不調の民間用MP用ソフトとして世界一の軍事国家日本の軍事産業を担う世界最大の売上高を誇る企業高須ホールディングスによる10億を投入した一大プロジェクト。

1千年以上前の世界を元にして作られたMMOARPG「オーAuralis ストーリーStory」
通称A・Sが発売された。

値段は3万5千とそこらの携帯ゲーム機、いや、家庭用据え置きゲーム機とさほど変わらない値段だったが2日限定の体験版により売り上げはあれだけの高価格なのにもかかわらず発売1週間で50万本を売り上げた。

だが、これが発売した当初はまさか、俺がこんなゲームに閉じ込められるなどと誰が想像しただろうか？

始まりは俺の友達が原因だった。

「お願いだ！！」

「は？」

「このとおり。お金は2万5千俺が出す。だからこのソフト買ってくれ」

俺は一番の親友である志太川健介。しだがわけんすけおっと、俺の名前が遅れたな。
あかすみりょうが朱澄凌雅。年齢は二人とも16歳だ。

「今日は部活もなく非凡な日だと思ったらゲームをして暇をつぶせと」

「だってさ、俺らのパーティに近接戦闘してくれる前衛がいないんだ」

「自分でやれ。」

「無理だって。おれ狙撃手だもん」

意味解らん。取りあえずこいつは先程説明した「Auralis isa Story」略称A・Sというゲームをやってほしいというのだ。

彼の言い分はこうだ。元々軍用として作られたMP。ゲームシステムはそれと同様に、現実世界でのステータスがゲームでのステータスと比例する。つまり、現実世界で力が強かったり足が速かったりするとA・S内でも力が強かったり足が速かったりする。

更に言えばゲームを構成する上でモンスターを倒したり、やはりアクションRPGなのでそれなりの事が出来ないとならないということ、現実世界よりもステータスが3倍になるという設定だ。

アクションゲームなのにジャンプしても高さが現実世界と一緒にではつまらないだろう？

だが、考えてみよう。本来握力が30の人と70の人がこのゲームをしたら90と210になる。

確かに割合は変わらない。だが、その差は明らかに開いている。元々40kgの差がいつのまにか120になっている。

と言うことはゲームを進めて行く上で現実世界で運動ができるやつや筋力が強い奴の方が有利になるのだ。

攻撃のモーションなどは基本プログラムが完全にサポートしてくれるAutoモードと半分サポートのhalfモード。完全に自分で動かすselfモードの三つに分かれる。Autoやhalfの場合は装備する武器系列独自の能力^{アビリティ}を習得する事が出来る。

だが、元々剣道や武道をやっていた人たちの技術に比べればチャッチイものである。

俺は小学生時代に合気道をしていた父に合気道を教えられ、剣術や、柔道をやらされた。

中学に入ってから別スポーツがしたいというが、球技はからっきしダメで出来るスポーツが陸上ぐらいしかなく、仕方なく流れで入ったのが功をなした。

中三では全国大会に進み中学生で100m10秒台という記録をだした。

高一の今では1年なのに県で1位である。

だからこいつは俺にゲームを薦めたのだろう。

「仕方ない。親の稽古用として買った民間型MPがあるから、買うよ」

「ホントか！？嘘じゃないよな？」

「嘘は突いていない」

「ひゃっほーい」

この時。友人の言葉を聞いた俺が間違いだっとは、後の祭りである。

STAGE 2：ロケイン

「成程」

家に帰ってすぐさまゲームを始めると、俺の部屋は真っ白な空間となり俺の横に四角い画面が表示された。

名前を入力してください。そこらのゲームとさほど変わりはない。

「えーと・・・」

名前名前・・・“あかすみ りょうが”だから、あかすみでアス・・・アスガにしよう。

他の手続きは適当に済まして俺はゲームを始める。

まず初めに選ぶのが種族である。

種族と言っても大まかに分けると人間か獣人族であるが、さらに細かく分けると獣人族の下に狼獣人や猫獣人等の動物種に分けられる。

俺は取りあえずぐさまに人間を選んだ。さすがに、俺に猫耳や、狼の耳は合わないだろう。

次に選ぶのが大陸。

千年前は今と違って大陸が少し違う。数世紀前に起こったシャンバラ規模の大災害によりシャンバラの地形は変わり世界は5つの大陸にわかれた。

だが、この世界ではまだ大陸が3つだった時代。世界の北西に位置するオーレリシア大陸。今で言うヨーロッパだ。東に位置するアシリス大陸は今で言うなればアジア。南西に位置するアーフカリア大陸。名前からしてこの大陸はアフリカ大陸である。この3つだ。

この3つの大陸の中から一つを選んで、また、その大陸の国家を選ぶ。そこでゲームは開始だ。

健介曰く、ギルドと呼ばれる組合に加盟した方がいいと。そこからソルジャーギルドで名を馳せれば軍に士官できるし、商工業ギルドに加盟すると企業を立て、商売をすることも可能。何事も基礎から固めなければならないということだ。

更にメンバーを集めてある地域で独立するなど、システム的には可能らしい。

ようするに、何でもありの世界と言うわけだ。

まあ、一人旅や、誰かとパーティ組んで冒険するのもある意味このゲームの醍醐味かもしれないが・・・

健介に言われたとおりスペインの原型、オーレリシア大陸のイスパニア帝国。

「初期設定完了。これから、あなたをオーレリシア・ストーリーの世界へお導きします。現実世界では味わえない感覚をどうぞご堪能ください」

無機質な声によるナレーション。この声が俺を悪夢へと導いた。

「GAME START」

真っ白な空間はだんだんと濃くなっていき、あらゆる世界が構成されていく。

「うつ！！」

眩暈とも立ちくらみとも言えない感覚に襲われ、まばゆい光に再び包まれると、俺は地上に降り立っていた。

「こ、ここが……オーレリシア・ストーリー」

俺が選んだのはイスパーニア帝国。降り立ったのは首都であるマドリッド。

時代が時代だけに当時と同じようなレンガの建物や、首都の中心マドリッド広場には大きな噴水がつけられている。

「おお、そこにいたか」

「ん？」

突然聞き覚えのある声に反応すると、予想通りのお相手がいた。

「健介か」

「探したぜ。まったく。お前のステータス見ていいか？」

「いいけど、見せ方知らないぞ？」

「視線を相手に合わせると相手の頭上にカーソルが出る。それに合わせて視界右下のメニューボタンを押すとメニューの中にotherって出てくるからそれを見ればいいんだ」

「成程」

俺はそう答えると視界右側にメニューボタンがあることに気づく。

「お前のステータスは・・・武器何も装備してないじゃねえか」

「今ログインしたばかりだ」

「まったく。基本的な装備はアイテム欄に入っているから気に入った装備つけとけよ。ほとんどの武器系統入ってるから。なにになに・・・なんだこのステータス!？」

俺のステータスを見た瞬間健介は驚愕の顔をした。何がそんなにかしいんだ？

「射撃と魔法以外全部俺に勝ってる・・・しかもこの差は何なんだ？」

「現実世界と比例するらしいからな。こんなもんだろ？」

そう言っただけ俺は健介のステータスと俺のステータスを見比べる。

・・・詳しくはプライバシーと今後のプレイヤーのために言わないが、平均して全てにおいて健介のステータスの3倍ある。

しかし俺はレベル1。健介はレベル12。なんだろうな・・・この差

「やはりお前を連れてきてよかった。レベル1でこれだ。相当前線で使える。しかし・・・普通に考えるとお前のステータスからするとレベル40はあってもいいぐらいだぞ」

「そうなのか？」

と言われても俺にはピンとこない。このゲームにおいてレベル40はどのくらいなのか。

「レベル40ってどのくらいだ？」

「今ゲームを一番早く始めて、課金連中ならばレベル50到達しているかどうかだ」

そう考えると俺のステータスがよほどすごいということが解る。

「これであいつらのお望み通りにしてやるぜ」

「話がついていけないぜ・・・」

何の話だがさつぱりの朱澄凌雅ことアスガはため息をついた。

——高須ホールディングス

「何処からの攻撃だ!!」

高須ホールディングス代表取締役の高須隆二は怒声を揚げる。

「お、おそらくは中華連邦共和国からの攻撃かと・・・」

「ちつ、チャイニーズが！！そんなにMPのデータが欲しいか」

MP・・・ミラージプログラムの略だ。

民間用のMPは相当に性能がダウンされているモンキーモデルな為、中華連邦共和国が国を上げてコピーしても仮想空間での軍事訓練ができないのだ。

そもそも民間用のMPはソフトがない限り仮想空間をつくることができず、日本の軍事訓練で使われているような仮想空間を作り出すにはMP自体にかなりのCPUとグラフィックボードが必要とされ、世界中の国家が精力を出しても開発には4半世紀以上かかると言われている。

ならばそれを開発した日本企業高須ホールディングスヘクラッキングを行いデータを取れば開発は早まるだろう。そう考える輩が出てくるのだ。

特にお隣の中華連邦共和国。

「だめです。侵入を防げません」

「チツ仕方がない。データのバックアップは取れているから、社内の電源を全面カット。非常電源も落とせ」

「そ、そんなことしたら・・・A・S管理システムがダウンし70万人のユーザーが・・・」

「・・・それも仕方あるまい。わが社の機密情報が奪われるよりも
ましだ。何も理論的に彼らは死ぬわけではない」

MPによって作られた仮想世界。A・Sを管理するシステムにより
ログイン、ログアウト、セーブ、ロードができる。略称A・S・M・
S(Auralisia Story Manager System)これこそが、仮想世界と現実世界を繋げる唯一の存在。

そしてそのデータが高須ホールディングス本社に作られているのだ。

理論的にはA・S・M・Sが一度でもダウンすると再びA・S・M・
Sを仮想世界に介入させる事は天文学的な確率で可能だが、まあ一
言で言えば不可能だ。だが、仮想世界は作られた状態で維持される
ため、死ぬことはない。その世界で永遠と生き続けることになる。

死ぬとするならば自殺か、もしくは誰かに殺される。HPがゼロに
なるからだ。

HPがゼロになると管理システムが作動しセーブポイントからやり
直しになる。だが、このセーブも管理システムがあるからこそであ
る。管理システムがダウンし、仮想世界に介入不可となればセーブ
は不可能となりHPがゼロになったらやり直しすることなど不可能
となり、結果的に仮想世界の中でバグが生じ延々とデータとしてさ
迷い続けることとなるだろう。

つまり無に帰ることだ。

「し、しかし・・・マスコミが黙って見過ごす筈が・・・」

「私設部隊で黙らせる！！この事は黙認だ。そしてA・Sの販売を終了しろ。民間用MPもだ。あらゆる小売店からA・Sを徴収し、ユーザーの親族にはデーモンデリーターによる悪魔化という処理もしておけ」

悪魔化・・・まだ人類が魔法を使えた時の話。

人々はMETを使い魔法を行っていた。だが、そのMETを体に大量に浴びるとモンスター化する。

そしてそれは今でも変わらない。モンスター化のことを今では悪魔化と呼び、それを処理する人々をデーモンデリーターと呼ぶ。

高須ホールディングスは悪魔処理という名でユーザーを死んだことにさせるのだ。

「はっ！！！」

「ユーザーよ・・・仮想世界で頑張ったまえ」

STAGE 3：ログアウト不能

「どうした？」

隣で歩く健介がメニュー画面を開いては閉じと意味のわからない行動を繰り返していた。

「いや、お前もメニュー画面開いてくれ」

「おう」

そう言っていると俺は視界右下のボタンに触れメニュー画面を開く。

「メニュー画面を開いたがどうしたのだ？」

「セーブボタンがない」

「……ほんとだ」

「更に言わせてもらおう。ログイン・ログアウトボタンがない」

「……どういうことだ？」

俺は今の現状を整理し始める。俺の視界の中には、アイテムとステータス、能力、装備、魔法と書かれたボタンが見える。だが、その中に本来ある筈のセーブ、ログイン、ログアウトのボタンがないのだ。

では、それらが無くなったらどうなるかということを考えてみよう。

まず一つ。セーブボタンがない。ではどうなるか？もし死んでしまったらセーブしたところからやり直しになるが、セーブができない以上俺はHPが無くなったらその場で消えるのか？

二つ目。ログインはしているのでいいだろう。ログアウト。ログアウトボタンがないということはログアウトできない。つまり現実世界に帰れないということだ。

「ちよつと待てええええええ！」

「お、おい……どうした？アスガ？」

「どうしたもこうしたもねえ！！俺はどうすれば帰れるんだ！！口グアウトできねえんだぞ？」

「システムの不調じゃないか？昨日までは確かにあったし」

そんな事を言っているとマドリッドでも騒ぎが始まる。

「ログアウトできねえぞ!!」

「どうなっているんだ？」

「ロードもできないわよ」

この仮想世界 A・S には最大で 70 万人以上のユーザーがログインしている。だが、実質時間とか予定というのもあり平均的に言えば 50 万人前後だ。そのうちの数万人はほぼ 24 時間プレイ中である。

彼らにとってはどうでもいいことかもしれない。だが、完全に趣味でやっている者。家族がいる者。仕事がある者。色々いる。そのよ
うな人々にとってはかなり大迷惑なことだ

「おいおい、他の連中もそうだぜ？」

「まずい状況じゃねえの？」

俺と健介は全く同じ意見となった。

答えは会えて口に出さない。それは周りの人々がさらなるパニック
を起こしかねないからである。

単刀直入に言おう。この仮想世界から脱出できない。

「……どうする？俺はこのゲームを始めてまだ2時間もたつて
いないぞ？」

「対策もしておきたいところだが……どうすれば……」

もし本当に此处から出られないとなると何か対策をして生きながら
えなければいけない。

しかし、その対策が解らないのだ。

さて、どうするか……

俺達是对策を考えながらも、宿泊施設へ泊って今日はログアウトで
きずに寝着いたのだった。

STAGE 4：健介死亡

「ふっ！！」

ブシャアアと言う効果音と共に辺り一面緑色の血に染まる。

「さすがは元剣道やっていただけあるな。それに筋力も半端ないパラメータだし・・・」

仮想世界のステータスと現実世界のステータスは比例する。それがMP専用MMOARPG「Aurallisia Story」略称A・Sのシステムだ。

さらに剣道をしていた俺にはAutoモードもhalfモードも必要ない。Selfモードだ。

自分で自由に動かせるこの感覚はやり始めたら止まらない。

「これでレベル20だな」

「俺追いつかれたぞ」

俺と健介は対策を練った末にこの混乱期を逆手にとりレベルを上げて金を稼いで、どのプレイヤーにも負けない実力者になろうという結論になった。レベル上げを初めて一週間。

俺は下位プレイヤーから中位プレイヤーとなった。

幸いなことに課金プレイヤーはもう課金ができず、アイテムで戦う

ことは不可能となった。

さらにセーブができないからHP無くなったらどうなるのだろうかということに恐れて、モンスターのいる地域に出るプレイヤーがかなりの数減少した。

ただ、先程言った課金プレイヤーの中でも極端な・・・例えば一日数万つぎ込むようなアホ共。つまり、このゲームにおいて上位プレイヤーたちだ。

彼らは管理されていない仮想世界なら何をしてもいい。と言う結論からギルドを組んで下位プレイヤーを襲っては金と武器とアイテムそして命までも奪っている。

つい最近の話では隣国の騎士団・・・まあNPCでプログラムとMETによって作られた人間だが襲われたらしく被害を食い止めるためにイスパーニア帝国でも警備が強化されている。

「ん？何の音だ？」

ピロリ〜とよくわからない甲高い音が鳴り響いている。

「能力が追加されたんじゃないか？」

「能力？」

俺にとってその言葉は発聞きだ。

「ああ。射撃、筋力、速度、免疫、迷彩、魔力等のパラメータがあるだろう？これが一定の値に達すると能力値に追加される能力だ。

レベルが上がることにほとんどパラメーター向上するが、装備によって強制的にパラメータが向上して能力が追加されることがある」

「成程」

メニュー画面を開いて装備ボタンをクリックすると、確かに横の欄に“所持能力一覧”と書かれていた。どうやら、迷彩値と速度値が更に向上したようで、本来走ったり動いたりすると迷彩値の高い低いに関係なく見つかるのだが、限りなく見つからないステルスが追加された。

「しかし、なぜ俺に白兵戦をやらせようとしたんだ？」

「考えてみる。現実世界と比例するなんて、このゲームをするプレイヤーの中にお前ほどの奴がなん人もいるか？MP自体もっている人間が少ないのに、その中でも4分の一しかやっていないんだ。値段も値段で、買って行くのは坊ちゃまや、俺みたいにバイトしている奴らぐらいだけだ」

「成程」

つまり、俺みたいに運動部がそんな高額な物買う金などない。更にゲームをする暇もないと。暇人で悪かったな！！

「そうになると、お前みたいにチート級なら近接選ぶだろうけど、他の連中は値が体力より少ないんだ。魔法とか射撃とか攻撃を受けずに戦いたくなる。だから前衛が欲しかったんだ」

「ようするに俺はこき使われる予定だったのか・・・そしてそのせいで俺はこの世界に閉じ込められたのか・・・」

「そーゆーこと」

「この陸上界の期待の星をこんなところに閉じ込めて・・・」

「はいはい自画自賛はいいですから。レベル上げようぜレベル」

「お前は俺が攻撃して弱ったの撃ち抜いてレベル上げてるだけだろ
うが!!」

「レベル上げねえゝ努力家は報われないものよぉゝ」

「!」

不意に聞こえた声に俺達は振り向く。

目の前には明らか善人余は思えない雰囲気プンプンの・・・簡単に
言えば変な連中だ。

「で、あんたたちは誰だ？」

スルーしようぜ、スルー。と言おうとした健介だが、その前にめんどくさいことを口走った奴がいることに彼は気づかなかった。

「私たち？私たちは・・・あなたたちみたいなの、努力家を紡ぎ取る
人達よ!!」

メンバーの一人・・・どうせ設定で身長を変えたのだろう。さすが
に顔を変えられないが・・・

高身長の女が突如として切りかかってきた。このゲームでの常識。レベルが高くそのうえ近接戦闘を使う奴は課金プレイヤー。

低レベルで近接を選ぶ奴はゲームを知らないか、もしくは現実世界でよほどの腕っ節を持っていたやつだ。

ゲームが発売されてたった2週間。ログアウトができなくなっている期間を考えると実質1週間だ。その間でレベルを50まで上げられるプレイヤーなど課金以外考えられない。

更にその上近接を使ってくるとなおさらだ。ゲームを進める上で有利になるのは一般人なら魔法や射撃などの遠距離攻撃だ。誰が好んで近接をしようと言うのだ。

つまりそれなりに余裕のある者。または近接武器で攻撃力の高い武器が手に入ったものだ。

そのような武器がそう簡単に手に入る筈がない。などなどの総合的観点からこれらのプレイヤーは課金プレイヤーとなるのだ。

「遅い!!」

攻撃力が刀系統の武器として最弱の部類に入る木刀で攻撃を防ぐ。

自分の防御力より相手の攻撃力の方が2倍以上あるなら防^{ガード}御したところでダメージが自分に加わりHPが減る。

だが、筋力値が高ければ防御姿勢の際に防御力に筋力値が付加されダメージが減る。付加された時に相手の攻撃力よりもこちらの防御力の方が2倍あれば自動カウンターが入り、自分の防御力から相手

の攻撃力をひいた分÷2の数分相手にダメージを与えられる。

「ぐう!!」

レベル20なのにもかかわらずレベル50の相手に自動カウンターを喰らわせたアスガは怯んでいる相手を見て何が起こったのかさっぱりわからないという状況だった。

自動カウンターという言葉のアスガは知らなかった。

「じ、自動カウンター?そんな馬鹿な!!私はA・Sの中でも5本の指に入るレベルだぞ!?レベル20ごときに!!」

相手のレベルはカーソルを合わせた際に名前と一緒に出てくる。それを見たのだろう。

「まだやるか?」

「くっ、ええい!!貴様だけでも何か取らせてもらっぞ!!」

「へっ?」

後衛で何もしてなかった健介に一機に間を詰める。それに気付いた俺は数歩遅れて健介の方に向かうが相手はレベル30も上。瞬発力とスピードはほぼ互角と言ったところだ。
さすがは課金プレイヤー。

「やめろおおおお!!」

そんな事を思っているも束の間、健介に既に斬りかかっていた。

「かはああああ!!」

おびただしい血を吐く健介。対象年齢12歳以上なはずなのにどうしてここまで過激なのだろうか？

「あゝ死んじやった」

健介のHPゲージがグンツと減って0になる。

「ログアウトやセーブ、ロードができないってのは多分A・S管理システムの不調なのよね。A・S管理システムが正常に動いてないもんで、A・S管理システム内の神経遮断プログラムや過激・性的描写カット機能も働かないのよ。だからこんなにえぐい姿に……って聞いている？」

「け、健介……」

目の前に横たわる少年は何と言われよう俺の親友兼悪友だ。その親友が目を大きく見開いたまま口と、そして腹から血を垂れ流して倒れている。

息はしていない。つまり死んだということだ。A・S・M・Sが作動していないのならロードされなく、この仮想世界の中でバグとなり永遠とさ迷うはめになる。

誰がそんな事をした？きまっている。目の前のこいつらだ。

「死ねえええええ!!」

「うげええええええ」

女の部下であろう2人を連続して切り裂いていく。

「低レベルプレイヤーで近接。しかもこの動き・・・あんたセルフアーね」

セルフアーとはいわゆる業界用語で、ほとんどのプレイヤーがauto。もしくはhalfでプレイするのにもかかわらず一部マニアックが体感するならこれとか言っただけわからず自分で攻撃するやつだ。

selfにerをつけてセルフアー。本来の意味は自己復帰遺伝子という意味だ。このゲームの業界用語とは意味が違いすぎる。

「ああ。だからどうした？」

（このステータス・・・尋常じゃないわ。このレベルでこれ。普通に考えたらレベル60はくだらない。此処は一次退散ということだ）

「エスケープ トウ ベース」

「うっ！！」

突然謎の言葉を発したと思いきや身体がまばゆい光に包まれ女は姿を消した。

「これが魔法か・・・」

あっけに取られていた俺の目を覚まさせたのは健介の死体だった。

「生きているわけねえか・・・」

勿論もう既に死んでいて生^リアイコンから死^{デス}アイコンへと変わる。

「まさか俺を巻き込んだやつが先に逝くとはふざけた世界だ」

そう言って俺は死んだ健介のアイテムと装備を貰う。と言うよりも奪う。

「お前の所為でここに連れてかれたんだからな。これはお礼としてもらう。なーに。立派な墓ぐらい作ってやるさ」

そう言っくとアスガは健介を引きずって目立つ所に墓をつくった。

「課金プレイヤーどもめ・・・いつか殺してやる」

そう心に刻みつけた。

STAGE 5：2年3カ月

PlayerNameアスガ

PlayTime2年3カ月09hour15minutes19
seconds

——アーフカリア大陸西部

「う、うん」

「眠れないのか？」

俺の任された依頼。某国皇女・・・イリアを目的地まで護衛。
そして今の状況は宿屋が近くになく、野宿する羽目になったため、
俺がずっと見張りをしているわけだ。

「あ、いえ、そういうわけでは」

「現に寝てないじゃないか」

「あっ・・・はい。寝付けないんです」

「何故だ？」

「いつアガルタ管理局につかまるか考えると恐ろしくて・・・」

「成程」

アガルタ管理局。通称人狩り。

この仮想世界は元いた世界シャンバラと区別をつけるためアガルタと呼ばれるようになった。そして高レベルの課金プレイヤーたちによって構成された数万人規模の軍団はある国を滅ぼし、アガルタと呼ばれる国を作り、瞬く間に周辺諸国を飲み込んでいった。

仮想世界を管理するA・S・M・Sがあればこんなことにはならなかっただろう。

だが管理されていない、いわばここはフロンティアなのだ。やりたいう放題。レベルが上がれば例え銃弾が当たったとしてもダメージを受けない。そんな世界なのだ。

そして国を作り上げた課金プレイヤーたちは他のプレイヤーたちを誘ったり、またはさらったりなどして自分達の国に連行し開拓をさせ、国を大きくさせている。最初はオーレリシア大陸の小国だったはずが今ではオーレリシア大陸の半分を飲み込んでいる。

NPCを雇えばさう必要はないのだがお金がかかる。さらに何万人となれば莫大な費用がかかるのだ。自動生成されたNPCは殺せても脅しには効かない。意味がない。ならプログラムではなく心のあるプレイヤー。プレイヤーかNPCかはカーソル合わせただけで解る。

死にたくなければ俺らの奴隷となれ。このようなセリフを吐いて某世紀末漫画みたいに人々をさらって働かせているのだろう。

そしてこのアガルタの人々を狩る課金プレイヤーたちの組織“アガルタ管理局”をみんなは恐れてこう呼ぶ。

“人狩り”と・・・

そこで彼らからのプレイヤー狩り。略称PH（Player Hunt）を避けるため。そして真の楽園^{アガルタ}を作るために約数千人の人々が決起しアフカリア大陸西部で独立を果たした。だが、人材も兵器も領土も足りない。そのため決起を起こしたプレイヤーとしては珍しい女の子が皇女となり色々試行錯誤をしている。

その道中に襲われたらどうするのだ？と言う話し合いになり、高レベルプレイヤーがほとんどいなく、国を守る兵士すら欠けている独立国では有名な何でも屋を雇うことにした。

それが俺だということだ。

「俺は居眠りなどしないぞ。だから安心して寝てろ」

「は、はい」

年齢的に言えば俺とさほど変わらないだろう。こんなに幼い子を皇女に押しつけて大人たちは恥ずかしくないのかとつくづく思う。

つまりそれだけみんな切羽詰まっているのだろう。

誰かにすがりたい。そしてこの少女はその期待に応えようと努力する。

可愛そうなものだ。人口は増えたと聞いたがそれでも一万人。

総勢50万の兵力を有すると言われるアガルタ軍が本気で攻めてきたら勝てるはずがない。

さらに50万の軍勢のうち10万はレベル50以上のいわゆる高レベルプレイヤーである。

残り40万はほとんどがNPCである。

だが、この国民のほとんどは低レベルプレイヤーだ。

俺が見た中でもレベル50に達している者は僅か3人。

勝てるわけがない。

だが、俺としては金が入るならそれでいい。

「あのーちよつといいですか？」

「ん？何だ？」

「もしよろしければの話ですが、私たちの国に着いたら、そこで働きますか？」

「何？」

正直言つてとんでもない提案だった。

人を何人も殺したそこのPHと変わらない事をしている俺を雇用するだとか？笑い話にもほどがある。

「やめておいた方がいいぜ。一言言っておくが俺は何でも屋だ。何でもするってことは人殺しも盗みも某国皇女を殺すことすらためらわない。人狩りよりも危険人物な俺を雇うとは・・・金で動く俺だ。

あんたらを裏切るのもいつかわからんぜ？」

「やっぱだめですか……」

声のトーンが下がる。言いすぎたか……

だが、これでいい。大切な人を失う感情はもう味わいたくない。そして俺は俺なりにあいつらに復讐をするつもりだ。それを邪魔されるのもどうかと思う。

「あんたをあの国に送り返すまではどんな依頼が来てもあんたを裏切るつもりはないからそこだけは安心しておけ」

「あ、ありがとうございます」

「ホントそればかりだな。損な性格していると思うぜ。正直どうなんだ？あの子の皇女とやらの立場は？」

「た、大変ですけど……みんなが応援してくれるので頑張らなくちゃと」

「応援ね……自分がやりたくない仕事を何一つ逆らわないあんたに押しつけているだけのように見えるが……」

「そ、そんなことはありません。みなさんしっかり動いてくれます」

「動くならだれでもできる。いざという時の責任や、あらゆることの指示、外交。どれもめんどくさいことだ。だからあんたに押しつけたのだろう？それもいい年の大の大人たちが……恥と言言葉がないんだろ？」

「み、みんなの悪口を言うのはやめてください!!」

イリアは夜中だというのに大声でアスガを一喝した。

「しっ!!」

「す、すいません。ついカッとなって・・・」

「静かにしている」

アスガは鼻に人差し指を立てる。

目線をきよろきよろ変えながら耳を立てる。

「グルルルル・・・」

「獣の声？」

「いや、違う!! 避ける!!」

「きゃっ!!」

俺はイリアに抱きつくように飛びかかる。それと同時に草むらから飛び出てくる謎の影。

「・・・めんどくさいのに出会ったな・・・」

「な、何があつたのですか？」

「……獣人だ」

「獣人!!」

獣人……と言っても種類は豊富だが、基本的に獣人族とさほど変わらない。

違う所と言えば生まれた場所だ。人間界で生まれた獣人族は基本人語をしゃべり、人間と同じ生活をする。そのため獣人族にも仕事場がある。プレイヤーでも人間ではなく獣人族を選ぶプレイヤーも少ない。

そして今であったこいつらは野生で生まれ、野生で生活してきた。そこらのモンスターと何ら変わらない。つまり俺たちの敵だ。

しかも、獣人族自体人間と同じ知能を持ちながら、獣と変わらない身体能力を持っている。

だからめんどくさい相手なのだ。

「下がれ……サーチ開始」

イリヤを後ろに下げさせ敵の情報を読み取る「サーチ」を始める。

「狼系統の獣人。モンスターレベルは32か……いける!!」

サーチ終了と共に足を踏み込み跳躍し、一気に間合いを詰める。

それと同時に拳を獣人の顔面に食い込ませる。俺の現在のレベルは211。俺にとって敵ではない。

「げふうつうつ」

口から大量の血を吐きだし眼を白目にしてぶっ倒れる獣人。カーソルを合わせて生アイコンから死アイコンに変わったことを確認すると、所有物を奪い取る。いわゆる“物色”である。

「は、はへえええ」

突然の出来事に驚いたのかイリヤは腰を抜かしその場に倒れてしまった。

「お、おい……これぐらいで腰抜かしてるなよ……」

「す、すみません。突然の出来事で……」

「しかし……これじゃあ、危ないな。あまり使いたくなかったが、
N・S・Aだ」

「N・S・A？」

イリヤは異物を見るかのような目で俺が渡したアクセサリーを凝視する。

「Not Search Accessoryの略だ。モンスターやプレイヤーの索敵能力を妨害する装飾品だ。すごい激レアアイテムだからな。ちゃんと持ってるよ」

「つまり……どういうことですか？」

そこから・・・呆れてものを言えないアスガだった。

STAGE 6：アガルタ軍始動

「つまりプレイヤーにもモンスターにも索敵能力があつて・・・」

「ふむふむ、成程。そんな能力があつたのですね」

索敵能力。現代戦で表せばレーダーの事だ。索敵能力が上がれば広範囲にわたってプレイヤー、モンスター、NPC、さらに上を行けば地形までもを把握する事が出来る。

そしてその能力にあらがうのがN・S・Aだ。現代戦で表せばステルス。もしくはECMといったところだ。

相手の索敵能力に引つ掛からない。目視確認する以外敵に見つからないというわけだ。

しかし・・・まあ、N・S・Aは高レベルプレイヤーしか知らないレアアイテムだから知らないのは当たり前だとしても、索敵能力は誰にでも知りえる能力だ。それを知らないとは・・・

「素晴らしいものですね。ありがたく受け取らせていただきます」

「よし。じゃあ先に進もう」

「ちょっと待ってください!!」

「なんだ？」

「だって夜中ですよ？そんな時間に動いたらモンスターに見つかつてしまうのでは？」

動けば迷彩値に関係なく敵が見つかる。これがこのゲームのシステムの一つだ。

さらに森林地帯では夜目が利くモンスターが多く、夜動くのは自殺行為とまで言われる。

まあ、俺には関係ないが……

「そのためにそのアイテムを渡したんじゃないか。俺には迷彩値と速度値を上げて、ステルス所持しているから。ステルスを装備すればそう簡単には見つからないさ」

迷彩値……いわばカモフラージュだ。この値が高ければ動かない限り見つからない。

だが、ステルスは違う。動いていても見つからない。この能力を所持するためには最低レベルは60必要と言われている。

様々なパラメータを上げることによって能力が追加されるが、装備するアイテムによって強制的に能力が追加されることもある。

N・S・Aにより追加されるステルス等代表例だ。ステルスに似たような能力としてはシャドーがある。これは影は見えるが姿が見えない。AIが馬鹿なモンスターには有効だが、プレイヤー相手に使うバカはまずいない。

「しかし……」

「あそこで寝ていても襲われることのデメリットの方が大きいから

な。それに後数時間も歩けば目的地アガルタ共和国に着くのだろう？なら朝一番に着きましたでいいじゃないか」

「で、でも・・・」

「グダグダ言ってる暇があったら動け。何かあったら俺が全部何とかするから。早く行くぞ」

「は、はい」

結局イリヤの心配したような出来事は起きず朝一番にアガルタ共和国にたどりついた。

「お、おかえりなさいませ姫様！！」

アガルタ共和国に入国するために通る砦で俺達は盛大な歓迎を受けた。

砦護衛の兵士たちによる歓喜と一般市民による俺に対する歓迎。とりあえず2年と3カ月人と関わりを持たなかった末にコミュニケーション障害となった俺にとってやかましい以外の何物でもなかった。

「さ、長旅でアスガさんも疲れているでしょう。アガルタ共和国でゆっくりしてください。アガルタ城までご案内しますよ」

イリヤはそう言う俺の手をひいて目の前の作り途中のお城へと出迎えてくれた。

このお城の完成レベルは1割に満たない。寝室とお堀は作られているが・・・それ以外は手つかずだ。

「寝室だけはちゃんとしてあるな・・・」

イリヤの作り途中お城見学で唯一褒められるのは寝室だけ。

お城を守るために必要不可欠な兵士。そして兵士に必要な武器。そして国を守る最大の重要拠点お城。この3つどれも一つとしてそろっていない。

「アガルタ管理局は遊ばせているのか？」

「はい？」

「いや、独り言だ。気にしなくていい」

そう考えるほか何もない。それとも本気で場所が見つからないのか？

「あの話、本当に駄目ですか？」

「何の話だ？」

「ここでは働くっていう・・・」

「駄目だ。それに俺を一年間契約させるほどの金はあるのか？」

「そ、それは・・・」

低レベルプレイヤーばかりの集まりで税金を徴収するにもまともに

集まらなく、兵士に払うお金すら足りていないという国家が一年間俺を契約させられるほどの契約金があったならば誉めてやろう。

「なら駄目だ」

「で、では・・・100Agで・・・」

A・Sと呼ばれる仮想世界での通貨単位は大昔に出来た通貨単位と全く変わらず、Au、Ag、Cuと3段階に分かれており、1000Cuで1Ag。1000Agで1Auとなっている。

居酒屋や食事処で飯を食べる時の平均値段が20Cu程度であるから、20Cu＝500円と見積もれば10Agは250万である。

「確かあんたの行き帰りの護衛代金が10Agだったよな？1年間働いて100Agつてのはちよいと少ないか？」

「こ、これ以上は・・・国の歳入の10分の1なんです・・・」

10分の1・・・ということはこの国の歳入は1Au。円換算で2億5千万・・・

「貧乏国家すぎるだろー!」

俺の持っている金額の方がはるかに高いとは・・・いくら持っているかはメニューを見ないと解らないが・・・ざっと1000Au近くはある。

毎日モンスター狩りやプレイヤー狩りを狩るPHH(Player Hunt Hunt)等でお金を稼いだり要らないアイテムを売

る、そして何でも屋を経営する事に2年と3カ月明け暮れていたらこんなにたまってしまい、レベルもおそらくA・S内トップクラスであろう211だ。

安全な街に立てこもる人が増えたため、トップクラス連中のレベルと低レベルプレイヤーとの差は開き、レベル的には中間に当たる50でも、人数が少なく高レベルプレイヤーとして扱われるほどだ。

もつとも俺の資金貢献したのはPHHだ。もともとPHをするのはよつぽどの自信家か、アガルタ管理局。通称人狩りぐらいだ。人狩りもそれなりの高レベルプレイヤーだ。

そいつらには絶対的に負けない自信とかなりのレアアイテムやレア装備がある。だからそいつらを狩ればかなりのアイテムと装備。そしてきつと誰かを狩って手に入れたであろう多額の金がある。無駄なアイテムは売りさばればいい。PHHだけで3ケタ近いPHを殺している。それだけ殺せばこれだけたまるだろう。

「……こ、これが限界で……」

「ならお話はこれで終わりだ。では、これで。次に会う時が敵ではないということを祈りますよ」

「待つ……」

イリヤは言葉が続かなかった。

どうしてだろう。あの人と一緒にいてくれるとすごく落ち着いた。すごく安心した。あの人がいればこの国はもっと繁栄できる。あの人はこの国に必要な人材。

わかっていても待つてくださいと声をかけることすらできなかった。

「お、お帰りですか？」

「ああ。また新しく俺は旅に出るよ。ここで、世話になった礼だ。あんにこの装備をくれてやるよ」

俺がこの国に来てからの案内人をずつとしてくれたユーマとか呼ばれる兵士に装備一式をくれてやった。どうせ余り物だ。

「こ、こんなレア装備を！！ほ、本当にいいんですか？」

「ああ。俺にとってはそんなもの必要ない。せいぜい、この国を守るための精進してくれ」

「が、がんばります」

「じゃあな。次会うときは敵ではない事を祈るぜ」

先程イリヤにも言った事をまんま言う。

「・・・こちらアガルタ管理局偽アガルタ監視部隊です。イリヤと呼ばれる皇女が帰国した模様。護衛として使われていたロングコートの格闘家はいないようです」

MET送還機・・・ジャンバラ中を覆うMETを使った通信機である。親機と子機の間でしか使えないが、斥候にとっては欠かせないものである。

その送還機を使いある男は通信をしている。

「成程。それならば今アガルタ共和国は無防備と言ってもいいのだな？」

「はい。そうです」

「ならアーフカリア大陸西部に設立させた基地から全軍を出せ。5千の軍勢だ。1日あればつぶれるだろう。いまだに城を守る城壁すらできていないのだ。すぐに出兵せよ」

「了解です」

それと同時にアーフカリア大陸西部に設立されたアガルタ軍5千の兵が動きだす。

設立された場所は誰にも見つからないとまで断言できる海と山、森林に囲まれた土地。

アガルタ共和国からの直線距離およそ—— 2 k m

STAGE 7：アガルタ軍侵攻

「これで、この国ともおさらばだな・・・」

イリヤの住む城から出た後、しばらくアガルタ共和国の街並みや人々の生活を見て行くのにぶらぶらしていた所為かかなりの時間がかってしまった。

遅くなりすぎると泊って行けとか言われそうだからきりがいいところで撤収を開始した。

「まあ、色々あったが久しぶりに人と話した気がする」

とんでもないことを言っただけの彼だが、本人に自覚は無い。

久しぶりに人と話したなど、普段人が口走るようなセリフではない。

「次はどの国へ行くのか・・・」

一番近いプトレマイオス共和国へ行くのか・・・そう考えていた時だった。

「!!」

感じる。感じるぞ・・・

アスガの索敵能力。リーダーに感知された大量の人間。

数にして数えられない軍団。それも隊列を崩さずに並んだ姿勢。間

違いない。

「アガルタ軍か・・・」

装備能力蘭にステルスとシャドーを追加し、草むらに隠れる。

彼らの姿を確認しアスガは確信する。

「間違いない。俺の読みは正しかった」

こんな小国。いや、微国とでも呼ぼう。こんな国家一日で滅ぼせるものをなぜ滅ぼさなかったか・・・ただ単に泳がせていただけだ。

たった一つの通路を何分もかけて進んでいった軍団はアガルタ共和国までもう数100mと言ったところだ。

「・・・もう、俺には関係ない」

そう言い聞かせ、アスガは歩きだした。

アガルタ共和国 砦

「敵襲！！敵襲！！」

「民間人はまだ完成途中のアガルタ城へ避難してください」

「厄介な連中だぜ・・・俺達は非常招集をかけた予備役をいれても

2000人なのに向こうは5000人以上だ。大砲までもつてきてるぜ……」

ユーマは砦の上から眺めて呆れる。勝てるわけがない。

「アスガさんがいてくれたら……」

レベル211。俺のレベル51。話にならない。レベル200相手にレベル50のプレイヤーが4人と対戦したとして見よう。人数において勝り合計レベルは同じになる。

だが、そんな数の話ではない。レベル50差もできれば人数など関係ないに等しいという。

50のレベル差がある相手に勝とうとするならば、自分と同じレベルを100人用意しないといけないほど差が開く。レベルが1違うだけでも2人掛かりで勝つのは厳しい。レベル差が2になれば4人は必要。レベルが一つ上がるごとにレベルの差×2と必要な人数が増えて行くのだ。それほどレベル1つ上がるだけでステータスに差が出るのだ。

「これは最終勧告だ！！この門を開けよ！！開けなければ宣戦布告と見なし、軍・民間人関係なく抹殺する」

はじめてであったのにもかかわらず放った言葉はこれ。明らか降伏しろと言っている。

「あの先頭の奴……殺していいか？」

ボルトアクション式のライフルを持ち5千の軍勢の先頭に立つ男に

標準を向ける。

「ソーマか……お前の射撃なら一発で死ぬだろう。こいつらに交渉権などない。やっちなえ」

「御意」

パンと重い音が響きそれと同時に先頭に立つ男の頭がぶちぬかれた。

あつけにとられたアガルタ軍を我先にと、皆から一斉射撃するアガルタ共和国軍。更に便乗して魔法攻撃や投石機による攻撃を行う。

指揮系統が乱れたアガルタ軍は混乱し、体制が整わないまま次々に死んでいく。

アガルタ軍の兵士一人死ねばアガルタ共和国軍の士気は上がる。

アガルタ軍の死者は数十秒で100人を超え4ヶ所に近付いていた。

そんな時だった。

「ええい！！怯えるな！！」

新たに軍勢の先頭に立った男が剣を一振り。

“ シュン ”

風を切り裂く音。

それと同時にひびの入る鋼鉄の門。

その衝撃によりアガルタ共和国軍の攻撃は止む。そのすきを見て大砲を装備している部隊が次々に発砲。砦は数分で火の海と化し、アガルタ共和国軍は初戦でこそ善戦したがあっけなく撤退し、作りかけのアガルタ城で籠城する事となった。

だが、防壁もない城でどう籠城しろというのだ？ 答えは無理だ。多分1日持たないだろう。

唯一の救いは先の砦の戦闘で死者が出ていないということだ。

「くくく・・・我々アガルタ管理局に逆らうとは・・・その罪・・・その命で償ってもらおう」

高笑いする男を先頭に4000ぐらいになった軍勢はアガルタ城へと向かう。

「あの砦がこんなに燃えて・・・」

俺には関係ないそう考えていた。

「くそっ！！どうにでもなれ！！」

アスガは進む。その先は——アガルタ城

STAGE 8：アスガ王

「わ、私たちの家が・・・・・・・・」

「ひ、ひどい・・・」

作り始めてから半年。いまだ完成の兆しが見えないアガルタ城の中で外を見ておびえる民。

そして完成していない城壁に即席で盾や瓦礫を詰めて作った防壁の裏で待機する兵士。

「さあ、燃やすのだ。何も残らずになあ！！」

たった一人の男の指示で4千の兵士たちはアガルタ共和国の家を、田畑を、森を、草原を、家畜を、何も残らず焼き払って行く。

「これが、我がアガルタ管理局に逆らった天罰だ！！！！！！！！」

高らかに吠え、叫び、街頭もとい下等演説を繰り広げる何処ぞの剣士にアガルタ共和国の兵士たちはいら立ちを隠せなかった。

「あの野郎！！俺達の大地を焼き払いやがって！！」

「ユーマ・・・もう一度・・・撃っていいか？」

「・・・・俺もその話に乗るぜ」

「俺もだ」

次々にソーマのは話しに乗り出す。一斉に集中砲火を浴びせせめて指揮官だけでも殺そうという考えなのだろう。

悪くない。冥土の土産だ。ユーマはそう考えていた。

このゲームで死んで冥土などあるのだろうか？

「チャンスは一度だ。全員構えろ」

狙撃手。よほど喧嘩に自信がない限りほとんどの奴は安全に戦える遠距離を選ぶ。射撃か魔法。このどちらか。そしてアガルタ共和国軍予備役を合わせた2000人の兵士の半分以上が狙撃手だ。

「俺は剣士だからな。指示はソーマに任せた」

「御意・・・俺のメッセージと同時に放つ。わかったか？」

メニュー画面のotherにあるメッセージ欄に了解の言葉が次々に現れてくる。

3・2・1・

次々と更新されていくメッセージ。そのメッセージに1が現れた瞬間、アガルタ城からは何重ものパンという音が奏でるハーモニーが聞こえてきた。

あの指示を出す剣士を殺すハーモニー。

「ふっ」

ユーマはそいつの唇がかすかに動いた。別に見えていたわけではない。自分の直感がそう言っている。

ユーマの直感は現実となり、弾丸が剣士に当たる寸前ですべてはじき返された。

「レベル104。アガルタ管理局でもベスト12に入るグラディウスには向かうとは・・・これが天罰だと思い知れ!!」

先程砦を破壊した時とは比べ物にならないほどの剣筋。本来近接攻撃のはずの剣士が能力と筋力、魔力を併用する事によって使えるようになった遠距離攻撃能力“ソニックウェーブ”

レベルが3ケタにならないと手に入れることが難しいとされる能力。

アガルタ城内の兵士、民間人が目をつぶり死を覚悟した。

だが、その死は一向に訪れない。

「くくく・・・これがローマ神話の軍神グラディウスの天罰とやらか・・・」

「だ、だれだ？」

「これで軍神にでもなったつもりか？・・・笑い物だ。厨二病も程々にな」

グラディウス・・・ローマ神話の軍神。

剣士は軍神にでもなりたかったのか、厨二病全快でこの名前をつけ

たのдарう。

「我が能力ソニックウェーブを防ぐとは・・・何者だ？」

「我が能力？馬鹿を言うのも程々にな」

「ば、馬鹿だと！！先程から私を厨二厨二とバカにしおって・・・全軍あの男に向かって進撃せよ！！」

指揮官の指示に従い4000の軍勢はアスガに向かって突き進む。

1対4000

いくらレベルが50離れていようと、勝てる数字ではない。そう、レベルが50離れていたならば・・・

「うらああああ！！」

「死ねえええ！！」

次々血気盛んな男たちがアスガに攻撃するが一向に当たらない。というよりも事前にはじき返される。

「お前達・・・誰を相手にしていると思ってるんだ？」

敵ではない。あからさまな余裕を振りかざし、戦闘中にもかかわらず敵に話しかけるアスガ。不思議に思い、兵士たちはアスガの情報を得る。

「レ、レベルに、にひゃああああああああ」

「これ以上口にするな」

腰から引き抜いた剣を一振り。あたりにいた数十という軍勢が竜巻に巻き込まれたかのように吹きあがり、そのまま落下。勿論全員即死である。

「な、なんだこの能力・・・」

「能力？これは能力じゃないぞ」

「そ、そんな馬鹿な・・・いや・・・お前、もしかしてセルフア
ーか？」

「当たり前だ」

そう言っている間にも次々と兵士を切り裂いていく。一振りで数十人。何秒で4000に追いつくだろうか？

その時間はカップめんを作る時間がかからなかった。

「う、嘘だろ・・・」

「あ、あれが・・・アスガさんの実力」

「レベル211・・・」

アガルタ城から見ていた人々は、人間ではない別の——異物。いや、神か仏か等と空想上の何かを見るかのような目で見ていた。

「セルフアアの分際で！！こ、この私の部下を殺してくれたなあああああ」

理性を失いアスガに飛びかかる。だが、その攻撃は全くもって効いていない。

「言い忘れたけど・・・俺には^{オートマジック}自動魔法“^{アイギス}無敵の盾”がある。この魔法を打ち破るなら、伝説の激レアアイテムレーヴァテインか、これを破るだけのステータスを手に入れな。手に入れることができたらだけどー！！」

突きの構え。グラディウスの顔面めがけて一突き。

「ゲボオオオオオオ」

アスガの顔面に飛び散る血液。地面に垂れ流される血。このすべてがグラディウスが死んだということを物語っていた。

「・・・死人に口なし。ホントに口がねえな」

自分で口をつぶしたのによく言う。

「この死体からは自由に金や武器とって言っていいいぞ」

そう言うのアスガは立ち去ろうとする。

「待ってください！！」

イリヤはあの時言えなかった言葉を言った。

「ん？」

「あ、あの……あの……お、お城での話なのですが……」

「ん？却下だと何度も言っただが……」

「あ、あなたはこの、この、この国に必要な人です。どうか、考え直してはくれないませんか？」

「考え直せって言われても……」

辺り一面を見渡す。そこには一万の軍民両方合わせた、この国の民たちがトップである皇女と一緒に頭を下げている。

此处で断ったら俺恨まれそうだな……

「俺はタダ働きする気はないぞ」

「お、お金なら……あります」

「なんだと？」

「アガルタ共和国の領土、民、お金、アイテム……全てをあなたに捧げます。勿論私のこの身も心も。だからお願いします。この国には……私には……あなたが必要なんです!!」

「……」

突然の出来事に言葉を失うアスガ……

言っていることは・・・つまり・・・イリヤの夫となりこの国の王となれと？

「ということはアスガさんはイリヤ皇女の夫でこの国の王様なんですよね？」

ユーマが辺に横やりを入れる。

俺のはそのセリフを聞き嫌なフラグが立ったと察知する。

「お、王様・・・アスガ王！！」

「アスガ王！！アスガ王！！」

たくさんの人々が俺をアスガ王と連呼し叫び、万歳を繰り広げる。

この状況からして悟った事。俺に逃げ場はない。

そして思ふ事。ユーマを思いつきりぶち殺したい。

「ア、アスガさん・・・ふ、ふ、ふふ不束者ですが・・・よ、よろしく願います！！」

「・・・よ、よろしく・・・」

何言ってるの俺。違うでしょそこ。お断りしますだろうが！！

「王様ばんざーい、ばんざーい」

「こ、今夜は・・・や、優しくしてくださいね」

イリヤの頬笑みがたった今……VXガスレベルの危険指定に俺の
中に入った。

STAGE 1：物資強奪

「物資を運べ！！」

たくさんの人ごみを指示する男。その名はアスガ。

現実世界での名を朱澄凌雅と言う。

仮想世界での立場はアガルタ共和国初代国王。

「アスガ様の言ったとおりでしたね」

「ああ」

俺達がいま立つ場所。そこはアガルタ管理局軍。一般的にはアガルタ軍と呼ばれている軍隊の軍事基地。

二日前にアガルタ共和国に進攻してきたアガルタ軍は偽軍（アガルタ共和国軍の事。アガルタ管理局命名）をアガルタ城まで追い詰めるが、戦闘に強制介入してきたアスガに4千人の軍勢をフルぼっこされ、大敗北をした。そのことは本国でも行きとどいているだろう。

アスガは全員殺ったつもりだったが、一部生きていた人間がいて、そいつらから吐き出させた情報からアガルタ軍の軍事施設を特定し、物資を運んでいる途中だ。

なんせアガルタ共和国から直線距離にしてたったの2kmしかないのだ。なぜそんなに近くに軍事施設があったのにもかかわらずこい

つらは気づかなかったのか・・・

この国の危険予知の無さにこの先思いやられる。

「それにしてもどうすればあれだけ強くなれるんですか？」

「そうだな・・・1日中人狩りを狩って2年間同じことを繰り返せばな」

「え、遠慮しておきます」

人狩り。アガルタ管理局の蔑称だ。人狩りを狩れるほどのレベルのプレイヤーが何人いるだろうか？

俺自体元々レベルは低かったがステータスだけは以上に高く、そのためレベルが高い連中と戦って勝てばかなりの経験値が手に入る。本来自分のレベル+40ぐらいの相手と戦ってちょうどいいのだ。

つまり俺のレベルが上がるのに貢献したのはまさかの課金連中の軍団アガルタ管理局なのだ。

「物資の整理が完了しました」

「い」苦勞さん。さて、帰るとしよう」

予備役を含めた兵士に力に自信がある村の男たちを連れてこの軍事基地に来た。

俺の予想通り、5千人を蓄えるだけの広さと、食糧、武器。そして輸送に使ったのだらうと思われる荷馬車。重い荷物は荷馬車に乗せ

軽い物は人力で運ぶことにした。

アガルタ共和国

二日前のアガルタ軍進行による被害は甚大な物で、田畑は焼かれ、家は燃え尽き、この国に残ったのは灰とアガルタ軍兵士の死体だけだった。

唯一の救いはアガルタ軍兵士から物色した莫大なお金とアイテム、装備だった。

そのお金の量はアガルタ共和国の予算の100倍と言う逸話が流れている。

「兵隊さんのお帰りですよ」

イリヤはみんなと混じって蹂躪された国土の復興支援をしていた。その折にアガルタ軍の軍事施設から物資強奪してきた兵士のお帰りを見たのだろう。

「お疲れ様です」

「お前らの国の危険予知はどうなっているんだ？」

イリヤは帰ってきた形式上夫であるアスガにお茶をやる。

「お前らの国って……もうこの国はあなた様の物ですよ」

「ったく、めんどくさい仕事押しつけやがって」

「そんなこと言ってもあなた様はしっかり私達を導いてくれるこの国の希望だと私は信じて疑いませんよ」

「おれは何処の教祖様だよ」

ちらりと横を見ると、城の建設に熱心に働くNPC。

ゲームのシステム上なのだろうか、雇ったNPCがたった1日でこの国に来るとは・・・

明らかに人手が足りない。そう考えたアスガは隣街・・・ではないが、一番近い都市。隣国プトレマイオス共和国の都市ヤムスクまで行き、たくさんのNPC雇用を掲示板に張り付けた。

そのおかげか、1日で数千人のNPCを雇うことができ、その貼り紙を見たのか正規プレイヤーまでもがこの国へとやってきた。

「この国の希望か・・・」

さて何からしよう。指示する事はもう決まっている。食料も武器も金も手に入った。ならば、民にこの国の守りを強化させる時だ。

当分はアガルタ軍も攻めてくることはできまい。

民は国防。なら俺とイリヤは外交だ。アガルタ管理局と対立している国は多いと聞く。そこと手を組み、それを国益に繋げるのだ。

――アガルタ管理局

「軍神グラディウスが死んだ!？」

「ふざけたことをぬかすな」

円卓会議上で机をどんどん叩くいい年こいた人達。
年齢的には30代前半。

きつと親の金を啜ってこのゲームにつき込んだ愚か者たちだろう。
だが、この仮想世界A・Sがこんないい年こいた二ト連中に牛耳
られているとは……
何とも情けない話だ。

「事実は事実。そして単純にレベルだけならアガルタ管理局序列第
6位の軍神グラディウス以上のプレイヤーがいるということだ」

「それだけではない。半数がレベル50以上ものプレイヤーで作ら
れた5千人の軍隊を瞬時に蹴散らすということは単純に考えてレベ
ルは150あると考えていいだろう」

「その人……面白いわねえ。一度でもいいからお相手したいわ」

「アガルタ管理局中央議会12人のうち一人欠け11人になった。
この11人のうち誰がそいつを殺ろうが構わない。だが、あの国は
いずれアガルタ統治……そして我々をここに閉じ込めた高須ホ
ールディングスへの復讐の障壁になるということだけは忘れぬよう」

STAGE 2：共和国軍隊長

「送還機が5つに、魔導機関が18」

俺は今先日アガルタ軍基地から運び出した物資の整理をしている。

運んだ物資のほとんどは食糧や武器・弾薬等がほとんどだった。

その中に一部物珍しい物が入っており、ギルドや会社、軍隊が本来使っている送還機。

今で言う電話機や無線機のようなものだ。

そして、シャンバラが発展する元となった魔導機関。魔導機関を作動させるためには魔粒石と呼ばれるMETが結晶化した石を必要とする。

魔粒石には周辺のMETを吸収する作用がある。

魔導機関内に収納された魔粒石を破壊する。魔粒石の作用により吸収したMETが破壊されたと同時に大量に放出され、大量のエネルギーを生み出すことができる。

これが魔道機関の使い方だ。

「これを使わない手はないな」

「なんですか？それ」

まだ完成一割にも満たない城内に作られた大型の倉庫で何やらぶつ

ぶつ話していると後ろからイリヤが声をかけてきた。

「送還機と魔導機」

「全然わかりません」

声のトーンが下がる

「……こんな世間知らずの娘を誰が皇女に仕立て上げたんだ？」

「わ、わかりません……」

声のトーンがさらに下がる。

「まあいい。お前の仕事は国民に元気を与えるその笑顔を崩さない事だ」

「あ、ありがと……う……ございます」

ん？顔が赤くなったが俺は変なこと言ったのか？

「そうだな……」

アスガは索敵能力を使いアガルタ共和国をサーチする。

「中心にアガルタ城……」

目をつぶるアスガは白い紙に何かを記入していく。最初は何をしているか解らなかったイリヤだが、しばらくしてアスガが何をしているのかわかった。

「これって……私たちの」

「ああ。この国を開発するにはまず土地と周辺の地理を把握しないとな。俺ぐらいの索敵能力レベルならこの程度朝飯前だ」

「成程。さすがです、アスガさん」

アスガはアガルタ共和国の土地と周辺の地理が書かれた紙にさらなる加筆を加えていく。

「失礼します」

唐突に部屋に入ってきたのはアガルタ共和国軍副隊長のユーマ。隊長の姿はまだ俺は見えていない。ソーマと言う狙撃手かとも思ったがどうやら隊長は今不在で強くなる為の修行中と聞いた。

隊長が不在とは……この国はやはりおかしい。

「ちょうどいいところに来たな」

「はい？」

「これを見て何を思う？」

「えーと……共和国と周辺の地理ですか？」

「ピンポーン。じゃあ、この国を守るためにはどこに砦を配置するべきだ？配置できる数は4つとする」

「え、えーとですね……こ、こころへんですか？」

「1つはあっている。残りの3つは外れだ」

ユーマはお城からみて東西南北に砦を選んだ。

「ど、どうしてですか……お城は中央にありますから東西南北に設置すれば」

「まあ、まで。東に配置するのは間違っていない。なぜならこれ以上東に進んだところで俺達に利益は無いからな」

「り、利益？」

「ああ。まず、俺達に足りないと思ったのは材木と鉄等の鉱物資源、そして海産物だ。ここ周辺で手に入れられそうな場所は南部にある広大な森林と二つの山脈だ。この山脈まで進軍し二つの山脈の間に砦を作る」

「進軍ですか……」

「ああ。この狭い領土に2万は多すぎる。もっと領土を広げるべきだ」

NPC募集期間は1週間。たった3日間で7千人のNPCと3千人のプレイヤーが此処へ来た。プトレマイオス共和国はシャンバラでも1位2位を争う大国で国土が広い。

そのためオーレリシア大陸では人狩りにPHされる可能性があるということ。だが、アガルタ管理局とカルタゴとの間に戦争が起こったと聞くとプトレマイオス

共和国にいるのも危ない。

ならつい最近アガルタ軍5千人を一人で蹴散らしたという男がいる国の方が安全ではないか？ということになりプレイヤーすらここへ移民してくるものが増えた。

「……成程。此処まで進軍すれば、この山も……」

「ああ。この山脈が俺達に資源をもたらし、また、自然の要害となる」

そう言うとアスガは先程の地図に矢印をかき山脈との間に凸を記入する。

「そして西部には要塞はいらない」

「なぜです？」

「いい質問ですね」

ここ最近有名な……とはいえ2年以上前の話だが、A・I氏の言葉を使ってみる。

だが、ものの見事にスルーされた。

「西に4〜5km進めば海へとつながる。我々には海洋資源が足りないんでな。此処に作るのは砦ではなく海軍基地だ」

「海軍基地ですか……」

「とはいえ・・・俺達に海軍のノウハウ等はない。それについては隣国のプトレマイオス共和国からNPCを雇うことにした。それについてはOKだな？」

「はい。では北部は？」

「北という所だけはあっている。だが、北には要塞を2か所設置する」

「2か所？バランスが悪くないですか？」

東西南に一つずつ。西部には砦は無いが海軍基地をつくる予定だとならば、何故北だけに二つ作るのか。そこにユーマは疑問を持った。

「俺達の北に位置する国。何処か解るか？」

「えーと・・・カルタゴと言う国でしたか？」

「ああ。正解だ。この国は現在アガルタ管理局との戦争中だという話を聞いてね。アガルタ管理局の事だ。滅ぼす気満々だろう。ならこの国が滅んだということを考えると北からの侵攻の方が恐ろしい。そして、北部。アガルタ城から10km程度の位置に幅200m程度の川がある。この手前に砦を一つ。その向こうにもう一つ作るのだ」

「・・・第一の防衛設備が川の向こうの橋頭保。第二の防衛設備が川。第三の防衛設備が川の手前の砦。そう言うことですね」

「良くわかってんじゃねえか。当たり前だ。そうと決まれば、副隊長であるお前に進軍を命令する」

「そ、それが……」

少し戸惑いながらユーマは村の方を見る。

「どうかしたのか？」

「いや、此処に来たのはわけがありまして……」

「わけ？」

「はい……」

そう言うと彼はわけを話し始めた。

アガルタ共和国東村

共和国に入るための正式な手続きや検問をする関所の役割を果たしているのは東にある前回アガルタ軍にフルボッコされた砦だけである。

そしてその手前にある村を東村と呼んでいる。アガルタ軍に再生不可能なほどにフルボッコされた村であり、人は死なずとも家畜や田畑はぼろぼろである。

「この国に王様だと!？」

「はい。数日前にこの村をお救いになり、イリヤ様の妻に」

「わ、私がない間に……何が……どうなって……」

セミロングの金髪に女騎士らしい凛々しい整った西洋の顔。おそらく外国人プレイヤーだろう。

「フィオナ隊長殿。アスガ王はいい人でございます。フィオナ様もアスガ様をどうぞ支えてください」

「ア……アスガ……王だと！？……わ、私は……私は王様など認めん！！ユーマと、ソーマはどこへ行った？」

フィオナと呼ばれるアガルタ共和国軍隊長は副隊長であるユーマとソーマを探しに行った。

そこで捕まったユーマは散々言われた挙句、王様は断固として認めん。この国のトップはイリヤ皇女殿下だけであると言い張った末に

「成程。どうかしてほしいと俺に懇願か……」

「はい」

「なら、そいつはどうすれば俺が王だと認めるんだ？」

「私に勝てばだ」

「！！」

突然扉から光がこぼれる。その先には……

「なんだ・・・女か」

「バカにしているのか貴様は！！」

怒られた・・・何故だ？

「わ・た・し・は・この国の兵士たちをまとめ上げる共和国軍隊長だ！！貴様か？アスガとやらは」

「いかにも」

「・・・・・・・・」

ジーと俺をしばらく見つめた末に言い放った言葉。

「明日のアガルタ城前の広場で決闘だ。そこで貴様が王様にふさわしいか見極めてやる」

「だるっ」

「き、貴様あゝ」

「まあまあ二人とも落ち着いて」

仲介に入りこむイリヤ。イリヤの言うことならこいつも聞くだろう。そう考えたのが甘かった。

「イリヤ様！！こいつのどこが気に入ったのですか？もしかして国民全員を人質として脅かされているのですか」

「人聞きの悪いこと言うな。俺がこいつに懇願されて俺が仕方なくやっている。ただそれだけだ」

「……イリヤ様が認めても私は認めません」

そういうとフィオナは城から出て行った。

そこ普通認めるだろ。主君が認めてるんだからよ。

「アスガ様……此処は大人しく勝負を受けておいた方が……」

「何故だ？」

俺はこの国の王様だ。いまさら隊長殿が何を言おうとその方針は変えられない。

なのになぜ俺が勝負をしなければならない。

「フィオナは腕とレベルは確かなのですが……この国最強の頑固者で、自分の方針を絶対に曲げません。けれど、忠誠心だけは確かです。アスガ様を王様として認めさせればしっかり動いてくれることでしょう」

「成程。じゃあ、腕試しで遊んでやるか」

STAGE 3：決闘

「ア、アスガ様……本当にフィオナと勝負するのですか？」

「ああ。その予定だが……」

「フィ、フィオナは強いですよ」

「そうか、それは楽しみだな」

「き、昨日の剣士よりもずっと強いですよ」

「成程。それが仲間になるなら心強いな」

「そっじゃなくて」

「なら何を言いたいんだ？」

「は、話し合いで認めさせるってのは……」

「お前……この俺が負けるとでも」

「い、いや、そ、そんな事は、全然……こ、これっぽち……も……」

成程。信用しているけど、俺が負ける可能性が少なからず持っているということか……

「自身満々に言おう。俺はこのゲーム内で最強レベルを誇るプレイ

「ヤーだ。その俺が負けるとでも？」

アスガのこの気迫に押し切られたのか、イリヤはアスガがフィオナに負けるという考えを捨てざるを得なかった。

「わ、わかりました。そこまで言うのならいいでしょう」

——アガルタ共和国軍兵舎

「フィ、フィオナ殿……」

「ん？ユーマか。こんな遅くにどうした？」

「あ、あの、本当にアスガ様と決闘を？」

「当たり前だ。それとも、お前は私が負けるとでも思っているのか？」

「もちろん……」

勿論！！と胸を張って堂々と言うつもりだったが首筋にあてられたその鋭い刃に言葉を失った。

「ほう……いい度胸だな。この私が負ける？よほどの自信家だなユーマは」

「あなたに言われるほど自信家ではありませんが」

「ユーマが言うほど強いというのだ。明日の決闘が楽しみだ」

「人の話聞いてねえし・・・」

そこには明日の試合を楽しむフィオナと傍目で呆れるユーマの姿があった。

そして国民の英雄フィオナと国民の希望の星アスガの決闘が明日のアガルタ城正面広場で行われるということが国民中広まり、軍内部ではどちらに賭けるなどと言ったギャンブルまで行われていた。

アスガは知らないがフィオナも相当な実力者でそれを知るイリヤ、ソーマ等の兵士、国民はどちらが勝つなどとは断言できない。

出来る者はフィオナのステータス、レベルとアスガのレベル、ステータスを知っているユーマだけだ。

――翌朝 アガルタ城正面広場

まだ朝の7時だというのにもかかわらず国民のほとんどがアスガVSフィオナの決闘を我先にと見に来ていた。

「ふああゝ」

「遅い。なんだこの体たらくは！！それでもこの国のトップとして居座るものの態度か？」

朝からいちいちうるさい奴だな。アスガはさりげなくスルー・・・

「無視をするな!!」

「はいはい。　　たく元気があっていいことで。で、勝負とやらは?」

「この木刀で行う」

「ほう」

　　ってきりこつというタイプは真剣で戦うのかと思った。

「真剣ではないのか?」

　　取りあえず素に思った事を聞いてみる。

「真剣でやって人を怪我させるのもどうかと思うからな。さすがに、間違えて切り殺してしまったら大変だ」

「成程。そうだな、これから俺の部下になる奴を斬るのも王様としてどうかと思うからな」

「ふ、ふふははは」

「はっはっは」

「（絶対殺す!!）（）」

「勝負の合図は・・・俺の・・・空砲で」

「ああ。頼む」

ソーマは合図係をやりたかったようですぐさまにボルトアクションライフルを空へと向ける。

「両者……構え……」

ソーマの言葉と同時にアスガ、フィオナ両者は木刀を構える。

「3・2・1・」

パン

その銃声が両者の攻撃合図だった。

カンと乾いた音が鳴る。

所詮は木刀。誰もがそう思っていた。だが、その考えは甘いとすぐに気付かされる。

二人の剣筋が再びぶつかり合う時、今度はバキイと言う音が聞こえた。

「あちゃーこれじゃ……勝負にならん」

その音は二人の木刀が同時に折れた音だった。

「これだけの実力者なら真剣で勝負するのもどうだ？」

「その提案俺も乗るぜ」

両者は今度は自分の愛用の武器を手にし再び構える。そして

カキーン

と甲高い音が響く。

「そう。正にこの感覚。この感覚を私は待っていた。私と同等に戦える人を――！」

「久しぶりにこれだけの実力者と戦うことを俺は誇りに思える」

両者は戦いのさなかに笑っていた。だが、その微笑みはふざけた笑みではない。互いの実力を認め、そしてこの勝負を楽しんでいる。

「はあ――！」

「フン」

フィオナの剣筋を軽くあしらい突きの構え。

だが、その突きは軽快によけられる。避けたと同時にアスガの脇を狙って剣をふるうフィオナ。アスガは剣を持つ右手を折り返してそれを防ぐ。

一進一退の攻防。どちらが勝つなどと本当に誰も断言できない闘いとなっていた。

この中に割り込める人間がアガルタ管理局内にすらいないだろう。誰もがそう思っていた。

だが、この世界には息をのむような戦いを妨害するイベントが必ず

しもあるのだと・・・

「た、大変ですうううううー!!」

「ん？」

「戦いの最中によそ見か？」

その声になになった俺をフィオナはたしなめる。

「待て」

俺はそのフィオナに言葉をかけ止めさせる。

「君は誰だ？」

「き、北村の者です。む、村がドラゴンに襲撃されて大変なことに」

「マジか・・・決闘は一時中断。ドラゴン退治に向かうー!!」

「了解だ」

事情を飲み込んだのか、フィオナは言うことを聞いて俺に着いてきた。

よりによってこんな時にドラゴンか・・・

ドラゴンといっても奥深く下げればかなりの種類がいるが一番弱いドラゴンでも最低レベル100は必要とゲーム内最強モンスターと言っても過言ではない。

そんな最強モンスターがこんな辺境に？いや、むしろこんな辺境だからこそのいるのかもしれない。俺はまだ3回しか倒した事がない。さらに種類は様々。俺でも倒せないドラゴンがいるかもしれない。手に汗を握りながら俺達は北へと向かった。

STAGE 4：忠誠

——アガルタ共和国 北村

「きゃあああああ」

「あ、熱いよおお」

北村を襲う真つ赤な翼に漆黒の身体。鋭い爪。口から吐く赤と黒のドス黒い炎はこの前のアガルタ軍進軍で無傷だった北村を焼き払って行く。

「そうだ。もつともつと焼き払え！！これがアガルタ管理局の實力。召喚石使いのアルテミスの實力」

アルテミスと呼ばれるアガルタ管理局の女性は右手に光る宝石を手をしている。

召喚石

——成分的には魔粒石と変わらずMETで出来ている。魔粒石が記憶しているモンスターを所有者の魔力により召喚する事が出来る石の事を指す。

そしていまここに君臨しているドラゴンは召喚石に記憶されたドラゴンと言うことだ。

そのドラゴンによりこの村は崩壊寸前に陥っている。

「こゝ、これがドラゴン」

「はじめて見た・・・」

ユーマとフィオナは二人揃って声を上げた。

（こいつらはまだドラゴンを見たことがないのか・・・）

アスガは唇を舐めにやりと笑うと二人に声をかけた。

「いい経験値稼ぎだ。俺達三人でこのでか物を倒すぞ」

「ちょっと、アスガ様・・・さすがにこれは・・・」

「何を言っている。この国を守るのが王様であり、兵士だろうが。甘えたこと言ってるな」

そう言うのアスガはS W（S u b W e a p o n）である閃光弾を投げ飛ばす。

「伏せる！！」

その言葉と同時に二人は伏せた。

まばゆい光が空を包み、ドラゴンはその光に耐えきれず目を一定時間使用不可となる。

「あいつが怯んでいるのがチャンスだ。攻撃するぞ」

アスガはそう言うのと跳躍をし閃光弾の所為で墜落したドラゴンに飛び乗る。

このでか物に剣技等無用。攻撃力と、筋力だけが有効だ。時間があ
るだけ、ドラゴンの皮膚に突き刺し、目を二度と使えぬよう眼球に
差し込む。

「キシヤアアアアア」

目をつぶした瞬間ドラゴンの断末魔が耳に響き渡る。それと同時に
やみくもに火を吐き散らすドラゴン。

「フィオナ殿!!」

ユーマが叫ぶ。その声に反応するフィオナ。だが、もう遅い。フィ
オナの目の前には悪あがきをして火を吐くドラゴン。暗黒の炎が迫
っていたのだ。

「!!」

目を強く瞑り覚悟をした。それと同時に聞こえる声。

「フィオナアアアア!!」

これが走馬灯と言う物か? はじめて感じる感覚にどう対応すればい
いのかフィオナは解らない。

恐る恐る目を開けると走馬灯でも何でもない。アスガの声だった。

「ア、アスガ………」

「俺の部下になる奴が目の前で死なれちゃ胸糞悪いんでね」

焼かれてもおかしくないその炎に無傷で話すアスガ。

彼は何者だ？

「何で無傷なんだって顔してるな？これは自動魔法“無敵の盾”だ。よほどの事がない限り装備しないんだが・・・良かった。間にあって」

ドラゴンの炎がアスガに当たる前に拡散して広がり自分達には被害が出ていない。

こ、こんな魔法があるというのか？

「さて、俺の部下に傷つけようとした奴には懲罰が必要だな」

ドラゴンをたしなめ、独特の構えをする。

「アシュケロン！！」

装備を突如として変え、その場に現れた剣はごつごつしたどでかい大剣だった。

パツと見て、剣のステータスを図ったわけではないが、地面に落した時の溝の深さでその重さがどれだけの重さか解る。

「アシュケロン？」

「聖人ゲオルギウスがドラゴン退治に使ったとされる伝説の剣。ドラゴン退治にはちょうどいいかと思ってね。ソニックウェーブ！！」

あれだけの重さの剣を持つには相当な筋力値が必要だ。あの大剣を

持つだけでもそれなりの筋力値が必要だというのに、その剣でソニックウェーブをするなど、無茶苦茶にもほどがある。フィオナはその光景を茫然と見ていた。

一振りで振った方向めがけて突き進む衝撃波はドラゴンを真つ二つに切り落とした。

それで勝負は終わり。戦ったのは3人で経験値が大量に入ってくる。アスガはレベルが全く上がらない。ユーマはレベルが30も上がり81に。フィオナはレベルが3上がった。

「成程。フィオナのレベルは144か。確かにそれだけのレベルがあれば、まず負けないだろうな」

「あ、あなたのレベルは・・・」

「俺か？俺は211だ」

「2・・・1・・・1・・・レベルが200に到達している人がいるなんて・・・」

「意外だろ？」

「先程の戦いは手を抜いていたのか？」

「ああ。フィオナの実力をはかるためにな」

「私は浮かれていた。自分の実力に心酔していた。だが、私はドラゴンに手も足も出なかった・・・たった一撃でドラゴンを葬るとは・

・・・」

関心を超えて、現実味がないフィオナ。

「さすがに俺もあせったよ。女の子に傷が付きそうだったから」

「お、女の子？」

「ああ。どうした？固まって・・・顔が赤いぞ？」

「このゲームに入ってはじめて言われました・・・どのプレイヤーも・・・私よりレベルが低く弱くて・・・」

「そうか・・・なら俺はお前を始めて女だと認めたプレイヤーだな」

「はい。ならあなたは私が初めて男と認めるプレイヤーです」

「その前に認める物があるだろう？」

「そうでしたね。あなた様は私が仕える者です。そしてあなたをアガルタ共和国の王様と認めます」

「よし。ならば王様直々の命令だ。フィオナをアガルタ共和国軍隊長からアガルタ共和国軍最高指揮官とする。全力を持ってこの国に奉公せよ」

「はっ！！」

フィオナはアスガに忠誠を誓った。

STAGE 5：カルタゴ

「なかなか調子がいいじゃないか」

アガルタ軍に蹂躪された台地はアガルタ軍基地から強奪した魔導機関により耕されていく。

そして雇ったNPCを使い田畑はみるみる再生されていく。プロゲラム上の都合か、耕されていくスピードが以上に速い。これなら、田植えも早く済みそうだな。

「こ、これだけのNPCを……どうやって？」

俺と共にアガルタ共和国内の見周りに来たフィオナは共和国内のプレイヤーたちとほぼ同じ数のNPCを見て驚いている。

「このゲームではシステムの的に国王になれるんだったな。国王になったら国家の運営のための金は全部ステータスに出る。俺のステータスを見るといい」

「う、うむ」

フィオナは俺には見えないがメニュー画面を開き俺のステータスを見る。

メニュー画面は本人以外見ることはできないのだ。

「国庫財産……1682AU!?ど、どこにこんな額が……
きよ、共和国の国家予算は……1AUじゃなかったのか？」

「それでもNPC雇ってそいつらの家も建てたから相当な金使ったんだけどな。ほとんどは俺の金だ。1000AUは俺の所持金。残りの額は古くなった兵士の装備の売却価格と、帝国軍兵士の死体から奪った金、兵士から奪った換金アイテムの額、アガルタ軍基地から奪った軍事予算と言ったところだ」

「な、成程。ア、アスガ殿はこれからどうなさるおつもりで？」

「ん？まずはこの国の底上げ。農業生産を拡大させ、領土を拡大させ、軍事力を強化させる。まずはこの3つが重点だな」

「まずは？最終的にはこの国をどこへ持っていくつもりで？」

「そこまで俺を見きったか・・・さすがはフィオナと言ったところだ。」

数日間しか一緒にいないが、それだけでわかる。他の連中とは見る観点が違う。

こいつがこの国にいてくれたから、保てていたのだろう。

「そこまで俺の考えを見越していたとは・・・俺がなぜここまでレベルを上げていたか解るか？」

「・・・生き残るためですか？」

「まあ、それもあながち間違っちゃいない。だが、それが本質ではない」

「ではなぜ？」

「アガルタ管理局・・・蔑称人狩りを駆逐するためだ」

「く、駆逐ですか・・・」

呆れてものが言えなかった。

彼らが従える軍のうち10万人は正規プレイヤーでレベルは50以上ある高レベルプレイヤーだ。そのうち3万人はレベルが80越えと聞く。レベル100を超える者は12人。この12人こそがアガルタ管理局のトップ。アガルタ管理局中央議会。

正直この12人のうち6人は私の手でも勝てる。だが、このうち残りの5人が以上に強いのだ。一番低くてもレベル150はある。

彼らを全員駆逐すると・・・

「ああ。あいつらには借りがある。俺はあいつらに復讐すると決めた。だからこの国を強国へと作り変え、そして・・・」

「アガルタ管理局を倒す・・・とでも？」

「勿論だ。だから俺はやつらを倒すために毎日レベル上げに励んだ。そのためにした事はPHをする連中を殺す。彼らには絶対的な自身となるレベルがある。俺はレベルに比べるとステータスが高い。レベル1の時のステータスは現実世界のステータスと比例するからな。本当なら俺のステータスならレベル+40ぐらいってところだ」

「PHを狩る・・・その考えはなかった」

「奴らは人を殺している。ならば殺されても文句はいえんだろ？・・・」

・そうだ。こんど一緒にPH狩り行くか？」

「ひ、人殺しは遠慮しておきます」

「何言つてんだ。国を守るためには人殺ししないといけねえだろ？
慣れるために着いてこい」

アスガはフィオナを北にあるカルタゴへ連れて行こうとする。

カルタゴはただいまアガルタ管理局との戦争中なので人狩り狩りをするのにちょうどいいのだろう。

「ア、アスガ殿。無差別な殺生はいけません！！」

「ちえっ・・・連れねえ奴だな。まあいい。次は南部へ行こう」

「は、はい」

別の方向へ行こうとするアスガを見て胸をなでおろすフィオナ。

南部では新しく移民してきたプレイヤーと雇ったNPC達による開拓が始まっていた。

山脈から鉱物資源を運ぶための主要な道路をつくるため森林伐採が始まっている。

伐採された木々は木材としてアガルタ城に運ばれ、そこから必要に応じてあらゆる地方へと運ばれる。

「まだ、山脈までの開拓は進んでいないな」

「始まって間もないですから・・・」

「しかし、ここから大量の鉱物資源が取れるようになれば、国境線を防壁で固めることができ、敵の侵略から怯える必要はなくなる。武器・弾薬の生産にも欠かせないものだ。安価な武器を生産し各国に売りつけることで、資金を得ることもできる。此处にいる人々は戦闘レベルこそ低いが、職人系の高レベル者が多いと見た。それこそこの国の売りになるだろう」

「ふむ」

この国の現状を見て、何が適しているのかを見極め、国家を改革していく。

更にこの短期間だ。

イリヤ皇女殿下の判断。間違っではないなかったようだ。あの人自身はこれと言って特に芽出る才能は無いが、人を見る能力。これだけは長けている。

皇女殿下がこの国に必要とされている存在は彼女の能力ではない。

彼女の純粋な穢れない心だ。

「此处はまだしばらくかかりそうだ。西へ向かおう」

「はっ」

言われるがままに彼に着いていった。

西の方は問題もなく開拓が終わっていた。海まで道を開拓し、海には漁港が猛スピードで作られていた。

漁業を始めている人も多く、これなら内陸部に海産物が行きわたるだろう。

「後は・・・」

「問題の北だな」

前回ドラゴンの襲撃があつた北村だが、被害はアガルタ軍よりは少なく、復興にもさほど時間はかからないと見られていた。

そう、復興は。

やるべきことが一番多い北村。川の手前に砦。川に橋をかけ、そこに新たに橋頭保を設ける。完成しているのは橋だけである。ただ、たった数日で幅200mの川に橋をかけたことは素晴らしいことだ。耐久性は保証しかねないと言われたが・・・まあ、耐久工事は暇な時にやればよい。

「さすがに厳しいな・・・」

「そうですね・・・」

資源自体が足りないというのもあるが、何せ人手が足りない。誰でもいい。人数が足りない。

そんな事を考えている時だった。

「ア、アスガ様!!」

「どうした？」

共和国軍の兵士たちは主に北と東に守りを置いている。そして攻めてくるとなれば、北から攻めてくる可能性が高い。だからアスガは北に守りの重点を置いているのだ。

そして北村を守る守備隊の兵力は3000。NPCや、他プレイヤー等も入隊して5000人に増えたが、その半分以上を北にしている。

そしてその隊長を任せているのはユーマだ。ソーマは副隊長。

東村はアガルタ城からさほど距離がないため、アガルタ城守備隊と東村守備隊は統一されている。

「川の向こう・・・カルタゴから大量の軍勢が!!」

「アガルタ軍か!？」

「い、いえ・・・それが、カルタゴの国旗を掲げています」

「なぜカルタゴが攻めてくるのだ？」

「わ、わかりません」

「仕方ない。行くぞフィオナ、ユーマ」

「はっ！」「」

3人は橋を渡り、作り途中の砦を護衛する兵士に合流するつもりだ。

(間にあってくれ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9550z/>

A.S

2012年1月13日01時53分発行